

事例番号 115 アート・イベントで生まれた市民の力(岡山県玉野市)

1. 背景

玉野市は、岡山市の南部、瀬戸内海に面する人口約7万人の市である。1919年に三井造船所が設けられてから急速に発展し、造船関連業のまちとなった。市内の宇野港から香川県高松港まで宇高連絡線が通じていたが、瀬戸大橋が開通した1988年に廃止され、現在は主に貨物主体のフェリーが着岸している。宇野・高松間はトラック輸送中心にフェリーが1日100往復している。しかしながら経済の衰退は著しく、中心市街地の商店街はシャッターが極めて目立つようになっている。かつて整備したアーケードはボロボロになっており、撤去する金もないというのが実態である。そうになってしまった主な原因は、オイルショック後の造船不況、産業構造の変化(工業の衰退)、交通体系の変化(瀬戸大橋の開通、宇高連絡線の廃止、JR宇野線の支線化)、岡山市、倉敷市等への消費流出等にある。

最近において特に影響が大きくなっているのが消費の流出である。郊外には大型店が次々と立地し、また、岡山市や倉敷市までの距離も短いことから、モータリゼーションの進展の下で消費が市外に流出している。市内中心部にはハッピータウンという大型店があり(1995年に市内の他の場所から中心部に移転)、天満屋と「メルカ」(地元商店の集まりであるまちづくり株式会社が運営)とが半々で営業しているが(商店街の中の元気のある店はそこへも出店している)、今やそこでも空き店舗がポツポツ出る状況になっている。郊外の大規模店等の影響が大きくなっているためである。

玉野市には外から観光客が訪れるだけの独自の魅力ある資源が乏しいという事情もある。伝統文化は特徴的なものではなく、古い家屋もただ古いと評価されるだけのものが多い。

このような状況下で玉野市に再び人が集まるようにするためには、玉野市周囲の魅力ある観光地とネットワークで結ぶことが有効というのが市の基本的な考え方である。そのため、玉野市では人々の交通の結節点とすべく宇野港の整備に力を入れている。また、ネットワークを形成する際の有効な手法としてアートに着目している。



玉野市のロケーション (資料:玉野市)



宇野市中心部 (資料:「玉野みなと芸術フェスタ 2005 はなの港・アート展」パンフレット)



築港商店街(宇野港銀座)

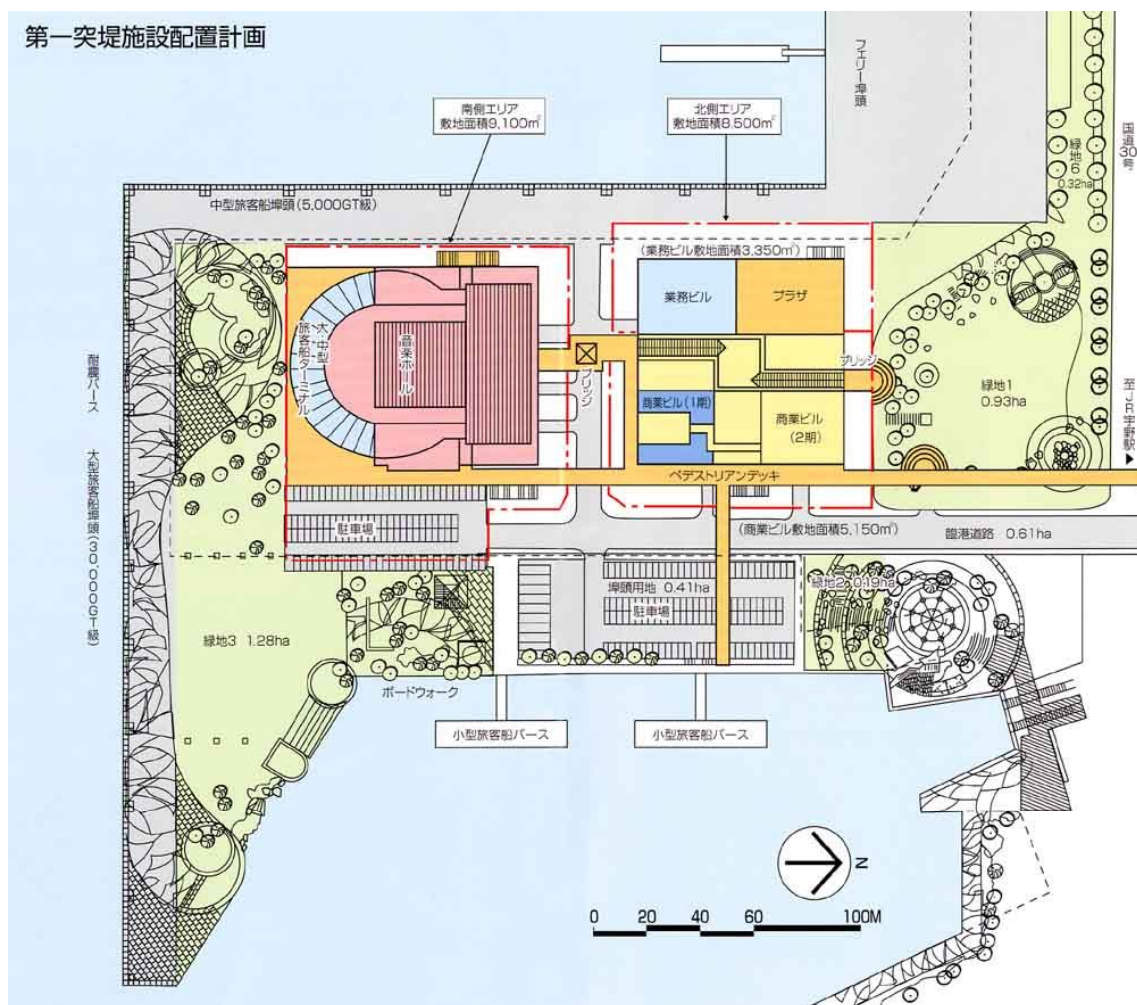


ハッピータウン

2. 目標

玉野市では宇野港を人々が交流する拠点として再整備することを大きな目標として掲げており、集う契機としてはアートに着目している。

これまで国及び岡山県(港湾管理者)により「人流港」としての宇野港再開発が進められ、2006年5月18日に大型客船が接岸できる岸壁(大型バース)が共用開始された。かつての物流中心の拠点から人流中心の拠点へと玉野市を脱皮させる原動力になることが期待されている。再開発のキャッチフレーズは「ポルタ・デ・UNO～24時間眠らないみなと～」であり、宇野地区が周辺の観光資源との海のネットワークを活かしつつ地域活性化の起爆剤となり、また、市民の交流の場となることをねらっている。



宇野港再開発 整備図 (資料:玉野市)

国土交通省中国地方整備局では2003年11月に「みなとオアシス」制度を制定し、港を地域住民や観光客など多くの人々が交流する場として整備する方針を打ち出したが、玉野市も宇野港をこの制度の対象とすべく「みなとオアシス宇野検討協議会」を設置して2004年10月以降ほぼ毎月(月によっては2～3回)市民参加のワークショップを開催してきており、2006年の同制度への登録

を目指している(登録されると国や港湾管理者から市が市民と協働して行う事業等に側面的支援が行われる)。玉野市は宇野港を観光ネットワーク拠点として整備するための計画を 2003 年に「宇野港周辺地域再生プラン」として策定した。

このように、玉野市のまち再生の基本的な目標は宇野港を人々が集う場所として再生することであるが、そのための仕掛けとして市が着目したのが「アート」である。宇野港からフェリーで 20 分のところに直島があるが、この直島は現代アートの島として有名である(ベネッセコーポレーションによる「ベネッセアートサイト直島」、「家プロジェクト」、「地中美術館」等)。直島は香川県に属しているとはいえ生活圏は玉野市に入っており、同島からは高校生や買い物客が玉野市に通っている。このようなことから、玉野市は現代アートを通じたネットワークを形成することにより人々の流れが生まれるのではないかと考えたわけである。

こういうわけで玉野市は現代アートによるまちおこしを目指すこととなった。玉野市が現代アートによるまちおこしに踏み切ることができた背景には、観光客の関心を惹きつけるだけの伝統文化が希薄であったという事情もあった。

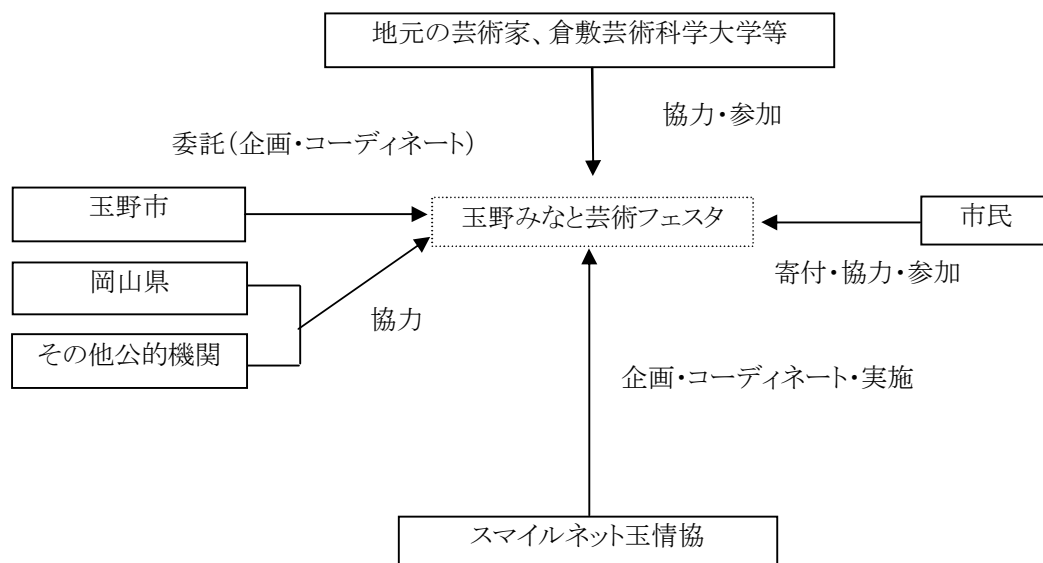
なお、「玉野市まちづくり総合計画」の基本構想(1995～2010 年度)では、「住んでみたいまち」「住み続けてみたいまち」「豊かさが実感できる都市(まち)」を目指すとし、基本政策の体系を下図のように設定している。「にぎわい」「交流」「ふれあい」等、人が集まることが重視されている。



玉野市まちづくり総合計画基本構想における基本政策の体系

3. 取り組みの体制

アーティスト、行政、商店街組織、市民団体、学校関係者、民間企業、市民等の協働によりアート・イベントが実現した。その原動力となったのは NPO 法人「スマイルネット玉情協」(2003 年設立、2004 年 NPO 法人化)であった。



4. 具体策

(1) 「玉野みなと芸術フェスタ」(2003年12月～2004年2月)

① 全国都市再生モデル調査

アートに関する玉野市の具体的な取り組みは 2003 年度のイベントから始まったが、市にはそれ以前からアートに期待する声があり、コンサルタントも交えて具体的な案をつくっていた。しかしその案は金がかかるということでお蔵入りになっていた。そのような時に都市再生本部で全国都市再生モデル調査の候補を募集するという話があった。そこでさっそく応募し(2003年8月8日締切)、全国 644 件の応募の中から「先導的な都市再生活動」として選ばれた 171 件のうちのひとつになった(2003年9月22日都市再生本部発表)。調査名は「玉野みなと国際芸術祭事業化を活用したみなとまちづくり方策検討調査」である。その前後のいきさつはおおむね次のようであった。

市と商工会議所とがコンサルタントも交えて相談し、数人の芸術家候補の中から現代美術・彫刻家の八木マリヨ氏を選んだ。八木マリヨ氏は各地で縄を使ったアートに取り組んでいた(京都市における「地軸」、豊中市における「地球縄ひろば」、ブラジルと日本における「地球文化の DNA」、アイルランドにおける「ザ・エコー・オブ縄スケープ」、貝塚市における「泉のコスモス」、神戸市における「ルーツ 心の絆」等)。そこで市は「玉野みなと国際芸術祭」として「縄のコスモロジー」なるイベントを実施することを考えた。

市はその案を説明するために、これまでイベントの中心となってきた各種団体(商工会議所、観光協会等)に声をかけ、公募による市民も交えて 9 月 19 日に最初の会合を持った(参加者は商工会議所青年部、商店団体連合会など各団体の代表者 15 名)。市は、まずは既存団体のネットワークづくりが重要であると考え、それは商工会議所の青年部を中心にまとめればうまくいけると判断したのである。ところが事はそう簡単には運ばなかった。

② 「スマイルネット玉情協」の登場

2003年9月19日に開いた最初の会合では、「なぜアートなのか」、「なぜ外から芸術家を呼んでくるのか」、「なぜ縄なのか」等の激論があり、結局何も決まらなかった。そしてその3日後の9月22日には都市再生本部が全国都市再生モデル調査の対象のひとつとして公表した。そこでその4日後の9月26日に再び会合を開いたが、またしても激論になってしまった。特に「縄」に対して強い抵抗があった。地元では何か立派な芸術作品を残したいという意向が強かったのである。そのため現代アートに対しても異論があり、既存団体からはこの事業を主体的にやろうという声は出てこなかった。

そのとき、「スマイルネット玉情協」(以下、スマイルネット)なる組織から声が上がった。スマイルネットはNPO法人を目指して9月24日に設立総会を開いたばかりの新しい組織である(2004年1月にNPO法人化)。そのメンバーから、「伝統文化に特徴的なものがない玉野市にとっては現代アートなど新しい文化を取り入れることも有効ではないか。市の活性化のためになるなら中心となってやってみよう」との発言があった。NPO法人化を目指して設立した組織の初仕事として何か役に立ちたいという意欲もあった。その声で場の空気が変わり、一転してスマイルネット中心にアート・イベントに取り組むことを決定して会合が終わった。

現代アートに「中心となってやってみよう」と乗り出したスマイルネットとは、若者の集まりではなく、60歳前後の定年を間近に控えた人たちの集まりであった(会員約20名、常時活動は約10名)。市内の情報処理関係者を中心とした集まりで、IT技術を活かして地域のために活動したいとの意欲からNPOを設立したのである。その定款には事業として次のものが掲げられている。

- ① 情報化時代における情報格差の是正、及び情報化の普及・促進に資する人材能力開発・文化的啓発活動
- ② ITを活用した地域環境づくりのモデル構築、及び防災、環境、医療、福祉、教育等の情報ポータルサイト構築及びシステム整備事業
- ③ 情報技術の向上に関する調査研究事業
- ④ 高齢者福祉等に関する調査研究及び利便性向上のための開発事業
- ⑤ 地方公共団体が市民と協働で行う、町おこしアート展等の参加型イベントの推進・支援事業
- ⑥ 瀬戸内エリアにおける観光事業振興のための観光交流空間づくりの推進・支援事業
- ⑦ 公共施設等の管理運営事業
- ⑧ その他目的を達成するために必要な事業

最後の方の項目は後で追加されたようであるが、上の会議を契機としてメンバーの運命は大きく変わり、結局スマイルネットは情報関連の活動もさることながら町おこしに関して地元で一目置かれる存在になっていった。

③ 短期間でイベントの実現へ

上記会合以後のスマイルネットの活躍は目覚しかった。市が提案した「縄のコスモロジー」はどこでも出来るような内容であったが、それに対しスマイルネットは10月1日に「玉野版縄のコスモロジー」を逆提案した。そして10月7日にはスマイルネットとしてイベント開催日程を決定し、「玉野み

など芸術フェスタ実施要綱案」を作成して 10 月 29 日には市との基本合意に至った。そして 11 月 4 日には八木マリヨ氏を玉野市に招いて関係者に説明を行った。

八木マリヨ氏の案は、「縄柱モニュメント」を市民参加で制作するというものであった。具体的には、着古した T シャツに願い事を書いて市民等から提供してもらい、それを縫い合わせて長い帯にし、その帯を振って紐にし、その紐を 3 本使って縄を綯い、その縄を中縄、大縄、特大縄と大きくしていった最後は支柱に巻きつけて巨大な縄柱をつくるというものであった。

その内容の是非に関しては依然として議論があったが、その後のシンポジウム、講演会等を通じて合意形成が図られ、最終的には「もやい綱」のイメージにつながる縄柱は港町玉野にはふさわしいのではないかということで議論が収束した。そして同年 12 月にはやはり激論を経て地域ぐるみ（地域の関係者、関係組織多数）の「玉野みなとフェスタ実行委員会」が設立された（実行委員長はスマイルネットの理事）。

縄柱は T シャツ 1 万枚を使って高さ 10m にするという具体的な目標が立てられた（宇野（UNO）はラテン語で 1 の意味）。制作した縄柱の扱いに関しても議論百出したが、最終的には火縄柱にして T シャツに書いた願いを天に届けるイベントにするとスマイルネットが決断した（そのためにタグ等を取り除いた綿 100% の T シャツを用いた）。

イベントは JR 宇野駅東側の広大な空き地（宇野駅東イベント広場）で行うこととした。この敷地はかつて「スペイン村」の建設を企画した場所である。三井造船、三越、天満屋、市等が出資して株式会社スペイン村を設立したが、バブル崩壊の影響により実現に至らず空き地になっていた（なお、この土地は 2005 年に地元の宇野港土地株式会社が地元の発展のために買い取った）。

縄の制作には地元関係者（学校、造船業等）の積極的な協力が得られた。学校では大勢の生徒や PTA が、地元企業では大勢の従業員が、市役所では大勢の職員が参加した。一般市民も数多く参加した。

NPO による全体スケジュールの進行管理には、造船業の作業工程管理の長年のノウハウが十二分に活かされ、きわめて短期間のうちに縄が完成した。帯縫いには延べ 266 名が、縄作りには延べ 2,050 名が参加した。一本の長い縄を綯うには参加者全員がリズムを合わせて動かさなければならぬので、その作業を通じて人々の心がひとつになっていった。完成した縄は 2004 年 2 月 7 日に支柱へ巻き付けられ（清掃、巻き付けに約 100 名が参加）、翌日のファイナルイベントを迎えることとなった。

2004 年 2 月 8 日、クレーンで高さ 10m の縄柱が立ち上がった。そして夜が来るまで真冬の強風の中、縄柱は天に向かってそびえ続けた。夜になり風も収まった頃合に、八木マリヨ氏と各団体の代表者が縄柱に点火した。縄柱は、児島喩加太鼓演奏の中で、巨大な火柱となった。それは人々の眼には「天に帰っていく姿」と映ったともいう。縄柱には人々の様々な願いが込められており、その願いが広がりつながったという思いもあった。その思いは、縄柱が消えたのとは対照的に、人々の心の中に長く残ることになった。2003 年度のイベントは、携わった人約 800 人、参加者も含めると数千人の規模であった。



「玉野みなと芸術フェスタ」の軌跡（資料:『アートハーバー宇野港への道～旅立ち』から作成）

④ 巨大縄柱マリンモニュメント創作の軌跡

2003年度のイベントについて主な出来事をまとめると以下のようである。

[2003年]

9月19日 玉野市企画課から市内主要団体に「縄のコスモロジー」説明、議論

9月24日 「NPO法人スマイルネット玉情協」設立総会

- 10月1日 スマイルネットから玉野市に対し「玉野版縄のコスモロジー」逆提案
- 10月29日 玉野市とスマイルネット「玉野みなと芸術フェスタ実施要綱案」基本合意
- 11月4日 八木マリヨ氏による縄アート説明会
八木氏からテーマを“UNO! Andiamo avanti”とすることが提案される
- 11月5日 芸術フェスタ実施要綱案を主要団体に説明、協力要請
- 11月10日 縄柱モニュメントを立て、ファイアアートにする方針を決定
- 11月13日 宇野小学校長(校・園長会長)に教育関係者の協力要請
- 11月16日 宇野中学校区、帯30本及び中縄制作の協力内諾
- 11月17日 広報用チラシ及びPR方法を確認、決定
- 11月21日 港と芸術に関するパネルディスカッション実施を決定
- 11月28日 芸術フェスタのPRチラシ完成、配布
- 12月1日 「広報たまの」に玉野みなと芸術フェスタのPRページを掲載
芸術フェスタのホームページ、メーリングリスト立ち上げ
- 12月4日 第1回拡大実行委員会開催、校・園長会に計画内容説明
- 12月5日 宇野小PTAで帯縫い作業開始(宇野小家庭科教室)
- 12月9日 第1回実行委員会開催(委員会組織、ワークショップ、シンポジウム手順確認)
- 12月16日 縄柱の建て方及び基礎を中電工に相談、電柱立て方方式に決定
第1回ワークショップを宇野小で開催、小縄及び中縄編み(宇野小体育館)
芸術フェスタのポスター完成、配布
「海・港・船と芸術」シンポジウム開催(八木マリヨ氏の講演とパネルディスカッション)
- 12月17日 第2回ワークショップを田井小で開催、小縄及び中縄編み(田井小体育館)
- 12月18日 第2回実行委員会開催(縄柱を燃やすことの是非を議論、是とする方向)
- 12月19日 築港小学校で小縄編み(築港小体育館)
- 12月24日 女性団体連合会で帯作り(玉野文化センター)
「宇野の大縄」新聞創刊号発行
山陽設計工業で小縄編み(三井造船構内)
給食センターで小縄編み(給食センター屋上)
- 12月29日 第3回実行委員会開催(火の意義確認、ファイナルイベント内容検討)
- [2004年]
- 1月1日 「宇野の大縄」新聞第2号発行
- 1月8日 三造ビジネスクリエイティブで小縄編み
- 1月9日 玉野市役所親和会で小縄編み(市役所ロビー)
企画委員会開催(ファイナルイベント実施要領打合せ)
- 1月13日 スマイルネットがNPO法人として岡山県の認証を受ける
荘内婦人会が玉原作業所で帯縫いボランティア
「宇野の大縄」新聞第3号発行
- 1月14日 玉野警察署と交通・警備に関する基本事項打合せ

- 1月15日 第4回実行委員会開催(ファイナルプログラム、現地配置案検討)
玉野市役所親和会で中縄2本緋い(市役所ロビー)
- 1月19日 玉野市役所親和会で中縄1本、大縄1本緋い(フェニックスロビー)
- 1月22日 RSK ラジオから実況ラジオ放送取材(24日放送)
天満屋ハッピータウンで小縄緋い(事務所通路)、店内広場(1F)に展示 PR
- 1月23日 玉野ロータリークラブの例会終了後、出席会員で小縄緋い(瀬戸大橋 CC 食堂)
- 1月24日 スマイルネット及び経済団体で小縄～大縄緋い(レクレセンター)
- 1月25日 宇野コミュニティで小縄～中縄緋い(宇野小体育館)
- 1月26日 三井造船玉野協力会で大縄緋い2本(三井造船構内)
玉野市役所で特大縄緋い1本(市役所ロビー)
- 1月27日 三井造船玉野協力会で特大縄緋い1本(三井造船構内)
第5回実行委員会(ボランティア要請計画、拡大実行委員会資料確認)
- 1月28日 第2回拡大実行委員会(ファイナルイベント内容確定、ボランティア動因要請)
- 1月29日 スマイルネット法人登記
- 1月30日 消防本部、消防団を交え、交通警備、会場警備の確認
- 1月31日 連合玉野地協で中縄～特大縄緋い(ミネルバ体育館)
- 2月1日 宇野コミュニティで大縄、スマイルネット・経済団体で特大縄1本制作(宇野小体育館)
- 2月2日 ファイナルイベントの PR 看板を現地に掲示
- 2月3日 第6回実行委員会(最終確認、荒天時の対応確認)
- 2月7日 会場整備、枯れ草刈、芯柱搬入、特大縄搬入、組付け、縄柱完成
- 2月8日 ファイナルイベントのアートセレモニー
岡山ディキシーブレンドの演奏
児島喩加太鼓の演奏
アートセレモニー式典
ファイアーアート



「玉野みなと芸術フェスタ ファイナルイベント」の看板

(2) アンケート調査

実行委員会は 2003 年度イベントに関するアンケート調査を行った(04 年 6 月)。対象者は一般市民(メルカ 1 階中央広場で実施)及びイベント関係者(市議員、教育関係者、拡大実行委員会委員等)である。回答数はそれぞれ 263 名、53 名であった。結果は以下ようになった(抜粋)。

(回答者割合:%)

質問	一般市民	関係者
「玉野みなと芸術フェスタ」が開催されたことを知っていますか？		
1 もちろん	58.6	
2 うすうす	21.1	
3 それって何？	20.3	
(1 と答えた人に)それは何で知りましたか？(複数回答可)		
1 「広報たまの」の PR 記事	31.6	18.2
2 PR チラシ	14.0	17.2
3 新聞記事	11.0	7.1
4 テレビ	8.5	2.0
5 ラジオ	1.1	1.0
6 ポスター	7.0	8.1
7 人から聞いて	19.9	9.1
8 実行当事者		36.4
炎縄の祭典にどんな感想をお持ちになりましたか？(複数回答可)		
1 素晴らしいファイア・アートセレモニーに感動した	30.0	15.3
2 もっと多くの人が見たらよかったのに	41.8	32.9
3 縄作りから参加できる協働芸術で、大変よかった	13.5	18.8
4 芸術フェスタはいいが、他のやり方もあった	12.4	20.0
5 つまらないと思った	2.4	1.2
宇野港の枕詞的な愛称として“アートハーバー”と呼ぶことに共感されますか？		
1 とっても	26.7	14.0
2 そうですね	58.6	52.0
3 どうかなー	13.9	28.0
4 全く	0.8	0.0
「玉野みなと芸術フェスタ」をどんなフェスタにしたらいいと思いますか？(複数回答可)		
1 アートガーデンやアートプロムナードなど街並み景観をよくするための芸術フェスタ	26.2	29.4
2 広い広場を借り切って行う、市民参加型の芸術展覧会	14.3	14.7
3 “アートハーバー”のイメージ創りのためのデザインコンペ	9.0	9.8
4 オーケストラ・和太鼓・軽音楽など各ジャンル合同の大音楽会	25.6	18.6
5 芸術大学生や地元芸術家によるアートの実演・展示会	13.2	17.6
6 有名な芸術家などを交えた“アートハーバー”宇野に関するシンポジウム開催	9.9	5.9

市ではこの結果について、「ファイナルイベントにおいては、非常に寒い日であったこともあるが、来場者数は 800 名余とやや少ない結果となった。中には、見に行くつもりだったが、気がついたらイベントが終わっていたという意見もあった」、「市民への浸透が不十分であったと言える」とし、「今後は、イベントの継続による市民への浸透を図るとともに、定常的に見られるような工夫も行っていく」としている。そして、今後の方針については、「今後数年かけて、新たな芸術文化を玉野市に根付かせ、宇野港を活気あふれる芸術港とすることを目指す。実施にあたっては、今後も市民主体の実行委員会において議論を重ねながら、幅広い市民参加を図り、地域資源を活用した、特色のある芸術祭にしていく」とした。

(3) その後のアート・イベント

① 次の「玉野みなと芸術フェスタ」への発展

市民への浸透の課題は残ったが、2003 年度のアート・イベントはおおむね大成功であったと評価されている。第 1 回目のアート・イベントということもあって幾多の困難があったが、それを幅広い人々の協力の下で市民団体主体で乗り越えたこと、火縄柱というあとに残らないアートが人々に外に開く心を残したこと、等が特に評価される。

一方、まちには寂れた商店街が残っていた。そこで、2 回目からは何か残るものを作ろうということになった。アート・イベントを続けて行うことに関しては実行委員長(スマイルネット理事)が強い意向を持って精力的に動いた。そして、2004 年度以降、「玉野みなと芸術フェスタ」を継続して行うこととなった。2004 年度の予算は県・市半分ずつの負担で総額 500 万円であった。

② 2004 年度のイベント

2004 年度のイベントに関しては、実行委員長斎藤章夫氏が 2005 年 2 月に作成した「実施結果の概要」にわかりやすく説明されている。2004 年度の目的は「新たな玉野の「美の創造」を目指して」となっているが、より具体的には「直島、玉野、倉敷などと続く瀬戸内アート圏を形成」「市民が誇れる魅力ある文化都市・玉野市を目指す市民運動を盛り上げる」等となっている。フェスタのテーマは「海・空・大地」とされた。これは、宇野港が海・空・大地の自然が美しい港であるからであるが、2003 年度のテーマ“UNO! Andiamo avanti”(海に空に大地に向かって前進!)との継続性も意識されている。そして、基本方針として以下の 6 項目が掲げられている。

- ① 市民参加型でありながら、一流を目指す
- ② 極力新たな創造による作品の制作・展示を原則
- ③ 地産地消を原則とし、地元の芸術家に協力を要請
- ④ 創作・展示場所については、宇野港周辺の空き店舗等有効活用 — 築港商店会などの協力要請
- ⑤ 自由な発想で美を追求できるアートを中心に、子供から大人まで参加できるようなアートを企画
- ⑥ “アートハーバー”のイメージに沿う町並み景観を追求する形の芸術作品

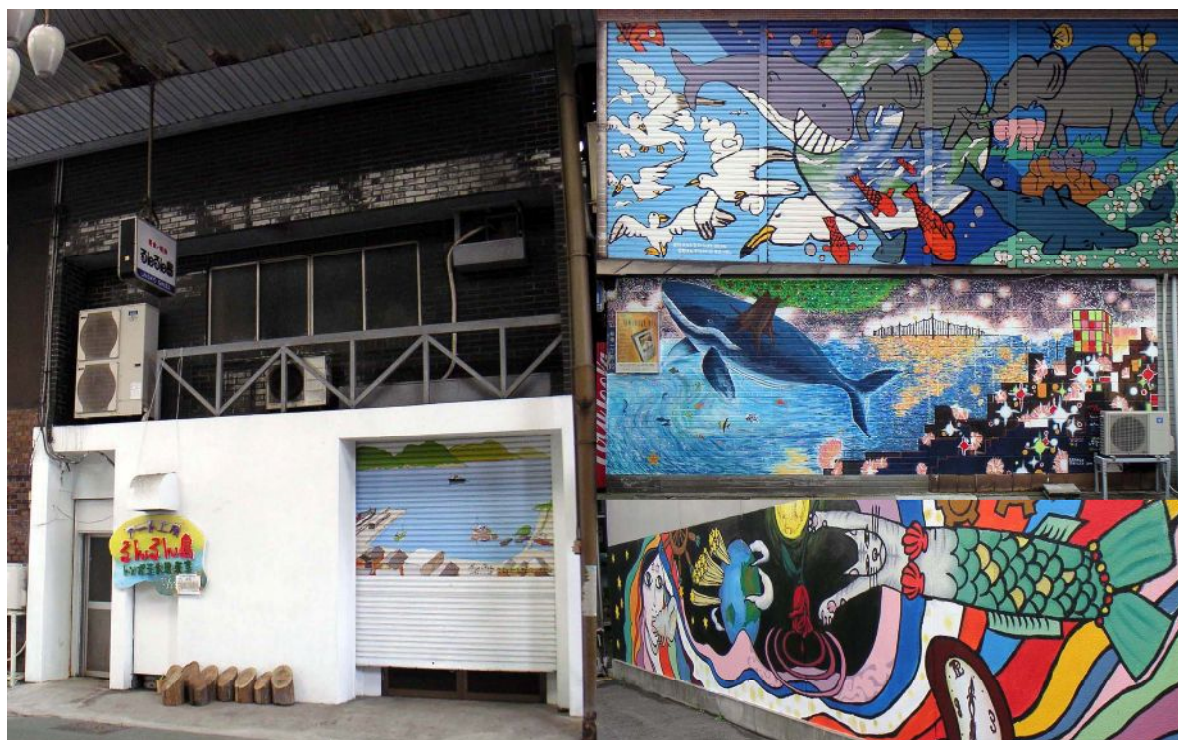
実施にあたっては、事前にベネッセアートサイト直島を見学・調査して地中海美術館館長等と議

論を行ったり、岡山県立大学、倉敷芸術科学大学を訪問して協力要請等を行っている。

2004 年度のフェスタは、6 月の市民アンケートの結果を集約し、また、直島ベネッセアートサイトの関係者の参加を得て、次のような内容となった。

- 1) アート工房(宇野港銀座内空き店舗を活用した「るんるん島」)
 - a. トンボ玉体験教室
倉敷芸術科学大学卒業生の指導によりトンボ玉体験教室を開催
(11 月 23～28 日、80 名参加)
 - b. チャレンジ体験、特別教室
(12 月～2 月、毎週水、土、日の午後)
- 2) 創作・展示、体験
 - a. 築港商店街の外壁&シャッターをキャンバスにした壁画(玉高、宇野中、築港小)
「海・空・大地」をテーマに築港小(19 名)、宇野中(13 名)、玉高生(13 名)が制作
(11 月上旬～2 月中旬、延べ約 200 名)
 - b. ファンタジーワールド展及び光のオブジェ展(11 月 23～28 日、バウハウス)
地元著名アーティストによる展示、制作体験
内尾和正氏(コンピュータ・グラフィックス)によるファンタジー画
高嶋幸市氏(スチロールアート)による光のオブジェ
 - c. CG による作品創り・実演(11 月 23、27、28 日、バウハウス)
パソコンで製作し、プリントアウト(18 名体験)
内尾氏による制作実演
 - d. スチロールアート作品創り体験(11 月 23～28 日、バウハウス)
高嶋氏指導による発泡スチロールを用いた立体造形制作体験(21 名体験)
 - e. 木工アート「盛舟製作教室」(2 月 20 日、るんるん島)
玉野市在住のそっくり人形作家鈴木輝昭氏指導による本格的木製盛舟製作(5 名)
- 3) ワークショップ「玉野のアート再発見」
 - a. 芸術フェスタ開催場所だけでなく玉野の隠れたアートを発見し、アートマップとして編集
 - b. 市内各所に配布し、旅行者や市民に宇野港周辺のアートを知ってもらい、アート散策に活用
 - c. インターネットにも掲載、QR コードの活用
- 4) シンポジウム“アートハーバー・宇野港を考える”開催(2 月 12 日)
近隣の文化都市とどう連携を図るのか、等をテーマに、地中海美術館館長秋元雄史氏の講演「直島アートとまちづくり」、パネルディスカッション「アートハーバー・宇野港への道」(コーディネーター平野重光氏)を行った。

2004年度の「玉野みなと芸術フェスタ」は、一般的に「市民の市民による市民のための芸術フェスタ」(スマイルネット)となり、宇野港をアートハーバーとして蘇生しようとする芸術フェスタの運動は多くの人たちの理解、賛同を得られた。2004年度のイベントで体験教室に用いた空き店舗は、現在もスマイルネットが「アート工房るんるん島」として運営を続けている。そこでは「トンボ玉クラブ」(スマイルネットが事務局、組織は別)が定期的に活動している。会員数は30名ほどで、彼らの作品はイベントのノベルティに採用されるほど技術が向上したものとなっている。



るんるん島(左)と築港商店街(宇野港銀座)の壁画(右)

③ 2005年度のイベント

第3回目にあたる「玉野みなと芸術フェスタ 2005」は「花の都・アート展」として2005年11月5～13日に開催された。予算は100万円であった。国土交通省の関連団体からの補助金で20万円、寄付金で80万円調達した(大口の寄付者は宇野港土地株式会社)。フェスタの内容は、野外アート展、こども作品展、トーク&ライブ、体験アート、街角壁画の制作、花の道しるべ設営から成る。それぞれの概要は以下のとおりである。

1) 野外アート展

宇野港及び隣接する商店街(宇野港銀座)を舞台に、学生・大人の作品を募集して展示会を行った。応募に先立ち、応募予定者を対象に現地見会を行った。地元のギャラリーが岡山県の芸術家に声をかけ、地元の芸術家中心に36人が参加した(展示場所さえあれば運搬費等は自前で負担してもいいということで参加した)。「瀬戸内への道」というテーマで陶芸や石、野草、木などを用いたアート作品が制作、展示されたが、イベント終了後は片づ

けられた。市民からは残してほしいという意見も出たが、そのためには作品を買い取る必要があったため、実現できなかった。

2) こども作品展

児童・生徒対象に募集した作品を宇野港銀座にある市の文化会館「バウハウス」で展示した。作品のテーマは「はなの港」であった。

3) トーク&ライブ

夜のイベントとしてバウハウスにおいて期間中日替わりでギャラリートーク&ライブを行った。宇野港の歴史、アートの役割等多彩な話と地元出身の演奏家等による市民が親しめる演奏、コンサートが行われた。

4) 体験アート

るんるん島で期間中毎日体験アートを開催した。玉野市や岡山市、倉敷市で活躍しているアーティストが指導した。

5) 街角壁画の制作

宇野港銀座のシャッター2箇所と店舗の壁1箇所です「はなの港」のテーマに沿った街角壁画を制作した。宇野中学校、玉野高校、中国デザイン専門学校の学生から募集した。

6) 花の道しるべ

会場となった宇野港及び周辺地域に真っ赤なサルビアのプランター200個を配置して会場の道しるべとした。直前に開催された「おかやま国体」で使用されたものを再利用し、水遣りなどは地元商店街等に依頼した。

スマイルネットでは、今回のフェスタの意義を次のように整理している。

- ① 港そのものを美術館に見立てた野外展という全国でも珍しい試みであった。
- ② 直島を訪れる観光客の多くがフェスタ会場を訪れ、地理的条件を活かすことができた。
- ③ 造船で使われた鋼塊や盤木等を作品化したことで産業とアートとが融合した創造になった。
- ④ 芸術家と市民との協働により多くの市民にアートの楽しさを知ってもらった。
- ⑤ 背後の商店街も宇野港の魅力のひとつとして捉え、港と街が連携・補完して活性化することを目指した。そのため、展示場所を分散させ、来訪者の回遊性を高めた。



シャッター壁画

5. 特徴的手法

アート・イベントをきっかけとしてまちづくりの中心的団体が育ったことが何よりも大きな成果であり特徴である。既存の有力団体とは無縁なところからやや偶然的に表舞台に出てしまったために行政や地元団体との関係を中立的な立場で築くことができ、今や地元の人々が一目置く存在になってしまった。

なお、上記のとおりスマイルネットが表舞台に出たのは2003年9月24日の会合によってであるが、実はスマイルネットに対しては設立総会前の8月5日に玉野市企画課が芸術祭開催の検討を内々に打診していた。市は早くからさまざまな組織に声をかけていた。

スマイルネットが精力的に動いたことによって、当初は難色を示していた組織をも巻き込んで地元が一体となるイベントを実現することができたのであるが、スマイルネットが若者の団体ではなく定年間近の人々つまりほぼ高齢者の集まりであったことがもうひとつの特徴である。日本ではこれから全国的に高齢者が急増することを考えると、このような団体がまちの人々を引っ張って困難なイベントを実現してしまったことは、多くの人々に感動と勇気と希望とを与えるに違いない。

そして、そのようなほぼ高齢者が先導しつつ近代アートという通常であれば若者が取り組みそうなイベントに取り組み、そのイベントを通じて市民が力をひとつに合わせたことがもうひとつの大きな特徴である。近代アートには人々の魂を揺さぶり心をひとつにする、一種宗教的な力がある。これから全国各地で地域社会づくりを図っていく上で、玉野市の近代アート・イベントの事例は大いに参考になるであろう。

6. 課題

予算を確保することが結構大変な課題になっている。アート・イベントは著名アーティストの作品を買い上げるのでない限り多額の予算を必要とするものではないが、モノが残らない事業だと予算が付きにくいという事情がある。これは財政問題に直面している多くの自治体で普通に見られることである。玉野市の場合は岡山市との合併話が御破算になった直後の2004年に台風と高潮による甚大な被害があったので、台所がとりわけ苦しいという事情がある。

まちを活性化させるためには人々の交流が何より大切というのが市の大方針ではあるが、市の援助で観光拠点のひとつとして2003年11月に開設したシーサイドレストラン「クッチーナ・デ・ウーノ」は経営者の事情からほぼ1年で閉鎖され、その後入ったインド料理店も料理人が就労ビザを持っていないことが発覚して閉店してしまうなど、不測の事態もあってなかなか効果が得られていない。宇野港再開発は「人流港」を目指しているものの、現状は物流フェリーが主体であり、人々が港に集う風景は見られない。貨物用岸壁には5,000トンクラスの旅客船も年に5～6回は入ってくるが、旅客は皆岡山市、倉敷市等に行ってしまう玉野市のまちの振興にはつながっていない。

玉野市にしかない、かけがえのないものは何か。それを見出すことがやはり最大の課題であり、アートがその発見の原動力になることが期待されている。そのアートでは周辺地域とネットワークを築くべく努力しているが、作品が残らないので実現には至っていない。そもそも作品を残すための予算がない。玉野市は小豆島、直島町とともに観光協議会を設けているが、以上のような状況からアートでの協力関係を築くまでには至っていない。

(参考・引用文献)

玉野市ホームページ

谷井利行「市民参加の力を引き出したアートによるみなとづくり」(『新都市』2005年3月号)

『アートハーバー宇野港への道～旅立ち』(玉野みなとフェスタ開催記念冊子資料集)